に無花果の藥を拵へることを云ひ附けた。彼等は拵へてそれを其の場所に附けた、すると神様の惠によつて王は癒された。

二、イザヤと王の恢復（八—十一。イザヤ書卅八〇九—十四）

（イ）神の御約束の記號。イザヤが尙ほ王の病床の側に立つて居る時、ヒゼキヤは自分の全快すると云ふ何かの記號を求めた。多分窓から宮庭にある大きな日時計が見えて居たのであらう。イザヤが云ふには、此が神様の記號である——蔭が急に進むか戻るかであると。

（ロ）王の願望は容れらる。「蔭が急に進むのは容易い。十度戻して戴き度い」とヒゼキヤは云つた。そこでイザヤが神様に祈つた、そして蔭が十度後に戻つた。

（ハ）王の讃美の歌。（イザヤ書卅八〇九—十四「少年科には話し、青年科には成る可く讀ませる」）。ヒゼキヤは充分よくなつた時、神様への感謝の歌を作つた、多分音樂に合はせて宮の中で歌つたのであらう。彼は病中の感じを述べて居る——その心細さを語つて居る。併し病氣の教訓をも述べて居る。今よりは殘る生涯を神様を讃美しつゝ過し、神様の惠を後世に

まで語り傳へようと云つて居る。

三、イザヤと王の愚舉（列王紀略下廿〇十二—十九）

（イ）諂ひの訪問客。此の後間もなくバビロンの王は、ヒゼキヤの病氣の事を聞き、手紙と贈物とを持たせて使者等を彼に送つた。ヒゼキヤは彼等を迎へてその語るところを聽いた。そこで彼は自分の寶物を悉く彼等に見せた——金、銀、香料、貴き油、武器等。實際、その有てる凡ての者を彼等に見せた、そして彼等は譽めて彼に諂つた。

（ロ）彼等の訪問の成功。その外國使節の去つた後にイザヤは尋ねた「此の人々は何を云ひましたか。何處から來たのですか」と。ヒゼキヤは答へた「彼等は遠い國から、バビロンから來たのです」と。イザヤは「彼等は汝の家で何を見ましたか」と尋ねた。「私の家にある者は何も彼も彼等は見ました。私の倉の中にあるもので彼等に見せない者はありません」とヒゼキヤは云つた。

（ハ）イザヤの嚴しき譴責。「お聽きなさいまし」とイザヤは嚴しく云つた「凡て汝の家に

ある物、御先祖等が今日まで積蓄へた物は皆バビロンに持つて行かれ、何も殘る物のないやうになる日が來る――汝の死んだ後に――と神樣が仰しやいます。彼等はまた汝の子等を連れて行つて、バビロンの王の御殿の役人にしまします」。ヒゼキヤは自分の行爲の惡かつたことを知つた、それ故「神樣の仰しやる事は御尤です」と答へた、そして自分の生きて居る間平和と眞實との續くのは有り難いと云つた。

主なる教訓――靈魂に取つては困難、辛苦よりも、成功の方が危險である。

第四十一課　第四決心日（十月十二日）

オデデの大勝利（歷代志略下廿八〇六―十五、七節及び十二節の名を書く）

注意――第四課の初めにある注意は今日の決心日にも適用さる。

【司會者へ】今日の決心日は特に、獨り立ちで家庭、學校、又は勤務先に於て種々の墨惡化に抵抗しなければならない立場に居る青年等に助となるべき筈である。彼等の多くは、私共にはまるで知れて居ないが、一騎當千の戰鬪を試みねばならぬのである。オデデの勝利は彼等に奬勵となるであらう。

緒言――ユダの國民は、惡しき王に導かれて大いに罪を犯した。彼等は子供を供物として

偶像に献げた、そして殘酷邪曲であつた。神樣は、そのお怒りを示す爲に、彼等が異教の國民及び隣國のイスラエルによりて攻められ打負かされることをお許しになつた。高壇から列代志略下廿八〇六―十五を朗讀。

一、勢力の支配（六―八）

（イ）大敗戰。イスラエルの人民は、ユダがその罪の爲に罰せられて居ることを知つて、自分の方からも之を攻めようと決心し、一日の中に十二萬人を殺した。

（ロ）捕虜と分捕品。彼等はその成功を誇つて、次には奴隷にしようとてユダから二十萬人の婦人と子供とを捕虜にし、また寶物を澤山運び去つた。男は皆殺されて、誰も手向ふ者はないから、彼等は思ふ儘に國中を掠めた。

（ハ）凱旋軍の歸國。勝つたイスラエルの軍隊はそこでその奴隷と分捕品とを携へて威勢よくザマリヤへ凱旋し、立派な手柄をした積りで、大歡迎を受けるものと豫期して居つた。

警告――如何に希望なく見えたことでせう！　ユダの男等は殺され、婦人子供は力足らず、

彼等は物を云ふ事さへ敢てしない。それに、勝つた兵隊は皆自慢さうに其の盜んだ寶や富を持つて歸る。「勢力」が勝を占めた、そして誰一人として一言の非難をする者も、立つて「正義」を擁護する者もないやうに見えた。今日の此の世界に於ても屢々さう云ふ事がある。惡事が行はれたのに、誰も正義の爲に快く立ち上る者がないやうに見える。多くの者はさうし度いのであるが恐れて居る。

二、オデデの高潔なる態度（九—十四）

サマリヤに神の使者の一人なるオデデと云ふ人が居た。彼は、其の勝利の軍勢が捕虜と分捕品とを擄へて凱旋して居る時に、彼等が間違つた事をして居ることを知つた。それ故彼は大膽に出て行つて、まだ市の門に達しない間に軍隊に出遭つた。彼が語ると、全軍が立ち止まつて聽いた。

（イ）彼は良心に訴ふ。「神樣はユダをお怒りになり、汝等が之に打勝つことをお許しになつた。そして汝らは恐ろしき怒を以て彼等を殺した」と彼は云つた。それから、泣き震えて

居る捕虜の方を見廻した。更に言葉を進めて「その上に尙ほ、汝等は此の罪なき民を壓制して奴隷にしようとするのである。併し汝等も亦神樣に罪のある者ではないか。だから今私の云ふ事を聽いて、此のユダとエルサレムとから連れて來た捕虜を皆直ぐに返しておしまひなさい。神樣の烈しいお怒が汝等に臨みます」と云つた。

（ロ）長老等は彼を援助す。今やオデデが語り出でたので、彼と共に出掛けて來て居た市の重立つた人の中の四人は、彼が如何にも正當であると思つた。それで彼が話を休むと、彼等は彼の模範に勵まされて、大膽に前に進み出でた。「汝等は此の捕虜を市内に連れ込んではならぬ。我々は既に神樣に罪を犯して居るのに、汝等はこれによつて更に罪を增さうとするのである。併し我々はそれを許さない」と彼等は兵隊に云つた。

（ハ）兵卒等は讓歩す。これには兵卒等も降參した、その心にオデデが正しくて自分等の間違つて居ることが分つた、それで其の事は中止にした。彼等は捕虜と分捕品とをオデデ並にその四人の友人の成すが儘に任せることにして其處に殘し、自分等は市内の銘々の家に歸り

往いた。

勸告――オデデが皆と一緒になつて大聲に叫んで兵隊を歡迎した方が餘程樂であつたでせう、併しそれを拒絶することによつて彼は勇氣と信仰とを示した。彼は「正義」を擁護する爲に獨りで敢て「勢力」に逆つて立つた。速かに四人の同志が起り、互に協力した時には兵隊よりも强かつた。その如く我々も屢々、惡である他人に有害であると知つた事に反對する爲に獨りで立たねばならぬことがある。神樣の力によつてそれを斷行する時に、他の人々が加勢するとか、或は他の方法によりて神樣が私共の證言を用ひ給ふとか云ふことが屢々ある。

三、正義の支配（十五節）

今では事情がすつかり變つて來た。兵卒等は其の捕虜と分捕品とをオデデの後援者等の成すが儘に一任した。

（イ）捕虜は自由にされる。そこで此の四人の善い人々は進み出で、捕虜を引取つて自由にし

やり、彼等を勵ました。また助けてあげるのだから恐がることは入らぬと告げた。

（ロ）分捕品は戻される。分捕品や寶物をサマリヤに持込んで兵卒等に與へると云ふやうな事をせずに、捕虜等に戻してあげた。盜まれた履物や着物で身を裝はせられ、盜まれた食物や飲物を御馳走されて、今一度自分等の所有物を用ふることを許された。

（ハ）人は本國に送り返される。彼等の多くは色々の被害の爲に精力が盡き身體が弱つて居た。それで盜んで來た驢馬に乘せて彼等をエリコへ送り返すと、先方の親戚等は之を迎へて今一度各々の家に落着くことが出來た。そこで例の四人とオデデとは、その大事業を成し遂げてサマリヤに歸つた。

勸告――神樣の御爲に何か行ふ時には、中途で止めてはならぬ、此の人々の如くに終りまで立派にやり度い。たゞ演說をした丈けで滿足するな、此の五人は分捕品が公平に配給されるやうに世話をやき、食事や運搬の事も計らひをなし、信仰家であると共に實際的で、事務的で、また親切であることを示した。

これは、多くの國々に於て、虐げられて居る助なき人々を助くる特權を神樣から許されて居る救世軍士官の實狀を描いた繪と見ることが出來よう。

主なる敎訓――假令獨り立ちになるとも、神樣の御助によりて敢へ正義の爲に立て。

勸告――此處に居る人の中には、神樣に事へることを始め度いと思ひながら、何かの場合に獨り立ちにならねばならぬことを恐れて居る人があらう。神樣はそれをすつかり知つておいでになる。オデデに惠と勇氣と知慧とをお與へになつた。貴君にも與へ給ふ。オデデの行爲によつて彼の市が罪より救はれ、彼は助なき人々を助けることが出來た。今日貴君が神樣の御爲に立つ決心をした結果として何う云ふ大きな事が出來るかは神樣のみ知り給ふ。（悔改の座）。

（例）クリスチャンの家庭から出た年の若い船員が、船に乘つた最初の時には、顏を知らぬ幾百人と云ふ人の前で跪いて新禱をする事がとても出來ないと思つた。殆ど止めてしまふ決心をし掛けた時に別の青年が跪いた。彼は直ぐそれに倣つた、すると他にも五人の者がその通りにやつた。彼等が起ちあがつた時に、第一にやつた青年は、他の者のひやかす眞中にあり乍ら、此の六人に向つてニコ〳〵し乍ら「勇氣を出し給へ、朋輩達、一緒にやり拔きませう」と云つた。航海の終つた時には毎晩二十七人の青年が新るやうになつて居つた。

第四十二課　ヨシア王に勵まされし エレミヤ（十月十九日）

―（エレミヤ記一〇六―十。歷代志略下卅四〇一―三、十四―十八、廿九―卅二。卅五〇廿―廿五）―

緒言――今日は神樣が其の民に遣し給うた最も偉大なる預言者の一人の生涯に於ける幾つかの場面を研究し始めるのである。ユダヤ人等がイエス樣の事をエレミヤの再現だと思つた程に彼等から尊ばれて居つた（マタイ傳十六〇十四）。

エレミヤは靜かな山の中の村の一祭司の年若き息子で、三人の王の治世に亘つて生きて居つた（一〇一―三）。今日は神樣が如何に彼を召し、その困難なる生涯の事業の爲に彼を準備し給うたかを見る。高壇からエレミヤ記一〇六―十を朗讀。

一、エレミヤは神によりて召さる（エレミヤ記一〇六―十）

（イ）彼は年の若きを訴ふ。まだ極く年の若い間に神樣の言葉がエレミヤに降り、彼がまだ

生れぬ前から、其の國民への預言者となるやうに神様から選ばれて居たのであると仰しやつた。エレミヤは震えながら答へた「ああ、主なる神様、私はお話が出來ません、まだ子供で御座いますから」と。

(ロ)神様は彼を守ると約束し給ふ。然るに神様は「子供だと云つてはならぬ。汝は我が汝を遣す凡ての人に行き、我が汝に話す事をその通りに云ふのである」と仰しやつた。エレミヤの云はねばならぬ事の中には、人々を怒らせるやうな事もあるから、神様は言葉を添へて「彼等の顔を恐れるな。我は汝と偕に居て汝を救ふから」と宣うた。

(ハ)神は彼の口に觸れ給ふ。イザヤの口は天使が觸つたので潔まつた。併しエレミヤの口は清かつたから、神様は御自分の御手を以て之に觸り給ひ「視よ、我が言を汝の口に入れた」と仰しやつた。エレミヤの仕事は悪しき物を根から引拔き、引き崩して打壊し、正しき物を建てまた植ゑることであつた。

二、エレミヤは勵まされる(歴代志略下卅四〇一—三、十四—十八、廿九—卅二)

(イ)王の模範によりて。ヨシアは善い人であつた。十五歳の時に心を神様に献げた、そして十九歳の時には勇敢にも偶像や偶像禮拜の撲滅を始めて居つた。

(ロ)律法の發見によりて。崩れた神の宮がヨシアの命令によりて修理されて居る際に、大祭司はモーセの書いた律法の寫を發見した。それを書記官長に見せた。そして順に王の手に屆けられた。書記官長のシャバンは、工事が立派に進行して居り、事を事務的にやつて居るとの報告をした後に、その貴重な卷物を王にお見せ申した。ヨシア王は直ぐにそれを自分の前で讀んで聞かせて貰つた。

(ハ)聖き契約によりて。今や王は其の凡ての民にも神の言葉を聞かせ度いと思つた。それで彼等を集めて、モーセによりて與へられた誡命、約束、警告等を聽かせた。その後で王は、神様の律法を守り神様に事へるとの契約を。神様に結んだ。そしてエルサレム並にベニヤミンから集まつた凡ての民にも同じくせんことを勸めた。

三、エレミヤの思ひ掛けぬ悲哀(卅五〇廿—廿五)

(イ)ヨシア王は干渉を拒絶さる。萬事好都合に運んで居る時しも、エジプトの王がアッスリヤ王と戰ふ爲にやつて來た。ヨシアには何の關係もなかつたのだが、彼は干渉することに決した。エジプト王ネコは彼に使者を送つて中立を求めた。自分は正當な事をして居るのであり、彼に害を加へる意志は更にないとヨシアに告げた。

(ロ)彼の時ならぬ死。併しヨシアはどこまでも參加することを主張し、變裝すれば大丈夫だらうと思つた。矢に射られた時、戰線の外に出して呉れと家來に云ひ附けた。彼は第二の車に移された、そしてエルサレムに連れられて來たが遂に死んだ。

(ハ)エレミヤの哀傷。國民の悲哀は想像も出來ぬ程であつた。誰も彼も悲み、聖歌隊が悲哀の歌を歌うた。併し誰にも優つて悲しんだのはヨシアの友なるエレミヤであつた。

主なる教訓——凡ての神の僕は、人生の途上に於て喜悅と共に悲哀に出遭ふ用意がなくてはならぬ。

第四十三課　禁酒學課（十月二十六日）

レカブ人の教訓（エレミヤ記廿六〇一—三、十—十六、廿五〇一、二、五—十二、十六—十九）

緒言——友たり王たるヨシアの死に對するエレミヤの悲哀の事を覺えて居るでせう。それより三ケ月の後に位に卽いたエホヤキムは餘程人物が異ふ。これから習ふ通り、エレミヤは今は獨り立ちになつた。高壇からエレミヤ記廿六〇一—三、十—十六を朗讀。

一、彼は死を以て脅さる（廿六〇一—三、十—十六）

(イ)彼は神の言葉を傳ふ。新しい王はヨシアのやうに善くはなかつた、併し神樣は御憐憫を以て彼に惠ふがき御言葉を送り給うた。エレミヤに命じて彼とその民とに語らしめ、神樣が其の市を滅亡より免れしめ又彼等を惠み給ふことの出來るやう、惡を離れよと彼等に警告を與へしめ給うた。

(ロ)彼の生命は危ふし。エレミヤの言葉を正當に受取ることをせずに、怒り狂へる大群集

が、祭司等や預言者等の指揮の下に集められた。彼等は、牧伯等、即ち市の役人等に云つた

「此の男は殺さるべき者です、彼はエルサレムが滅亡すると我々に云つたからです。それは皆さんのお聞きになつた通りです」と。エレミヤは今にも市外に曳き擦り出されて石で撃殺されさうな危險に迫られた。

(八)彼はその立場を守る。エレミヤの答は落着いて高潔であつた。「神様が僕を遣して諸君に之を告げしめ給うたのです。若し諸君が正しきを行ひ、神様に服從するならば、神様は此の市をお免しになります。僕の事は、諸君の好いたやうにしたまへ。併し僕を殺せば、罪なき者を殺した罰は諸君とエルサレムとに報いて來ます、僕の言葉は神様がお授げになつたのですから」と。

市の役人らも人民も、エレミヤの言葉と勇氣とによりて大いに感動させられて「此の人は殺さるべき人ではありません。彼は神様の御名によつて私共に語つたのです」と祭司等に云つた。

二、彼はレカブ人を驗す(卅五〇一、二、五—十一)

(イ)彼等に葡萄酒を提供す。一日神様はエレミヤにお告げになつた、重立つたレカブ人を宮に招いて葡萄酒の御馳走をせよと。最初にエレミヤは、之を見させる爲に市の重立つた人々を集めた、それからレカブ人等——屈竟な、膚の黑いアラビヤ人——を神様の家の特別な一室に連れて來た。エレミヤは彼等の前に酒のはいつた壺や杯を置いて、「汝ら酒を飲め」と云つた。

(ロ)彼等の强固なることを知る。併しレカブ人等は「私共は酒を飲みません」と答へた。そして彼等は、三百年以前に彼等の先祖ヨナダブの定めた命令の事を話した。先祖は彼等に酒を飲むこと、大きな家を建てること、種を蒔いたり葡萄樹を植ゑたりすることを禁じ、何時までも質僕な牧羊者として天幕に住み、始終住所を轉するやうにと命じて置いたのであつた。

(ハ)彼等の證言を聞く。レカブ人等はヨナダブの遺志を守り、彼等もその家族も生涯酒を

飲まなかつた。彼等は土地をも家をも所有せず、羊やその他の家畜に取圍まれつゝ天幕の中で暮した。たゞネブカデネザルを恐れてエルサレムの市中にはいつて來たばかりであつた。

三、彼は彼等の模範を用ふ（十二、十六―十九。〔十三―十五を話す〕）

（イ）悲しき對照。再び神樣はエレミヤに語り給うた。エルサレムに住む、神樣の御言葉を聽くことを拒んだ人々の所に行けとお云ひ附けになつた。彼はレカブ人等の服從の立派な模範のことを彼等に述べた。ユダヤ人らは、レカブ人等がヨナダブに服從した如くに神樣に服從することをせず、その御命令に更に注意を拂はなかつたのであつた。

（ロ）ユダヤ人等の來るべき運命。併し丁度ヨナダブの言葉がレカブ人を益する爲であつた如くに、神樣の御言葉は彼等の益の爲であつたのである。然るに彼等は一向に注意を拂はないから、エルサレムは征服されなければならぬ運命になつた。

（ハ）レカブ人等の報賞。それからエレミヤはレカブ人等に、神樣御自身よりの言葉を傳へた。彼等の强固なる服從の故に、彼等の名は決して朽ちないと彼は約束した。

主なる敎訓――惡に對して、敢て「否」と云ひ得る凡ての人を神樣は尊び且つ惠み給ふ。

勸告――凡ての惡に對して「否」と云ひ得るのでなくてはならぬ。殊に年の若い間に、レカブ人の如くに、酒の誘惑に「否」と云ふ決心を定めることは、その生涯を如何に大いなる危險より救うて、如何に有用幸福なるものとならしめるかを測り知ることが出來ぬ。

（次の事實は諸君の禁酒の決心に助けとなるであらう。米國が全國の禁酒を宣言して以來二ケ年間の、或る方面の結果は次の通りである。

（一）自動車の便――禁酒後二ケ年の米國には五家族毎に二臺の割合に自動車がある。禁酒前は二臺が三十家族の用を便じなければならなかつた。英國では平均家毎に毎週約十圓を酒の爲に費す。それ丈けの金を浪費して居た米國人が、それよりもずつと小額の費用で自分の家族を自分の自動車に乘せて外出することが出來る。

（二）長壽――カナダと米國とが追々に禁酒を進めて行つた近頃の十年間に、生命保險會社の統計によれば、人間が平均四年宛長く生きるやうになつた。それ故、大正元年に保險會

社が人間は平均六十六歳で死ぬものと思つて居たと假定すれば、今では七十歳まで生きるものと思はれることになる。

その他の統計も死亡率が驚くべく下つたことを示して居る。十年前のニューヨークの死亡率は千人に對する十六人であつたが、十年の後では十一人七分となつた。

(三)嬰兒の健康――ニューヨークに於て、禁酒の爲に一年間に救はれた赤ん坊の數は少くとも二千人であつた。大正九年の嬰兒死亡率は千人に對する八十五人であつたが、大正十一年には七十一人に減じた。

(四)刑務所の空室――ワシントンでは驚く程に犯罪者の數が減じつゝある。大正六年に毎日平均六百四十人の囚人があつたが、大正七年には三百七十人、大正九年には三百三十四人と云ふ好成績。

第四十四課　エホヤキム王とエレミヤの巻物　(十一月二日)

―(エレミヤ記卅六〇一―六、十四―廿八、卅二)―

緒言――今日は神樣が御憐憫を以て更に警告をその民に、此の度は書いた物によりて、お送りになり、それが如何に受けられたかを見るのである。高壇からエレミヤ記卅六〇一―六を朗讀。

一、巻物は書かれ、また知らる(一―六、十四―十九)

(イ)神より與へらる。ヨシアの息子のエホヤキムが王となつてから四年目に神樣はまたエレミヤに語り給うた。羊皮紙の巻いたのを持つて來て、ヨシアの時以來彼の國及びその他の國々の事に就いて神樣が彼にお授けになつた凡てのお言葉を書き記せと仰せになつた。エレミヤを通じて送り給うた警告を讀むことによりて、神樣の民が罪を離れて赦を求めるやうになることを望み給うたのである。

（ロ）バルクに口授さる。エレミヤは服從した。書記のバルクを呼んで、神様は云へとお云ひ附けになつた凡ての事を彼に口授した。それからエレミヤはバルクに告げた、自分は神様の家へ行くことが出來ないから、彼が行つて、お祭の日に宮に集つて居る人々に、その卷物を讀んで聞かせなければならぬと。

（ハ）バルクによりて牧伯等に讀み聞かさる。それ故バルクは大切な卷物を持つて行き、神様の家に集まつた人々の前に聲をあげて讀んだ。彼等は少しも注意しなかつた。ところが役人等はバルクがそれを讀んだと云ふ事を聞いた。そして彼に、來て其の卷物を秘かに讀み聞かせよと云つた。彼はその通りすると、彼等は之を王にも知らせねばならぬと思つた。「どう云ふ風にしてそれを書いたか」と彼等はバルクに尋ねた。彼はエレミヤの唇から出る言葉を一言々々書き附けたのだと說明した。預言者の書いた事を聞けば嚇かし王が怒ることであらうと云ふことを知つて居るから、役人等はエレミヤと其の書記とに秘かな所に身を隱せと忠告した。

二、卷物は王の前に差出さる（廿—廿五）

（イ）卷物は讀み聞かさる。それで役人等は先づ注意して卷物をしまつて置いた後に、王の所へ行つて卷物の事を申上げた。彼は直ぐそれを取らせにやつた。顧問役の一人なるエホデがそれを彼の前で讀み始め、他の者は皆聽いて居た。

（ロ）卷物はずた〳〵に切らる。時は冬（十二月）で、王の室には火の燃えて居る鑪があつた。エホデが三枚か四枚讀んだ頃に王は小刀を取つて卷物の其處のところを切り放し、怒りながら火の中に投げ込んだ。

（ハ）卷物は燒かる。讀み進めて行つたが、讀む片端から王は卷物を切り割いて、遂に神様が折角彼にお送り下さつた御言葉を悉く燒いてしまつた。顧問役の或者は默つてその側に立つて居つた。併し三人の役人は勇ましく語り出で、王にその所爲を思ひ止まつて戴き度いと願つた。彼は聽き容れなかつた。

三、御言葉は繰返さる（廿六—廿八、卅二）

（イ）エレミヤとバルクとは保護さる。神の御言葉を書いた卷物をすつかり燒いてしまつた時、王はエレミヤと其の書記とを捕へに人を遣した。併し神様は彼等を隱して安全に守り給うた。

（ロ）卷物は再び書かる。御言葉の寫がもう少しも殘つて居なかつたが、神様は再びエレミヤに語り給うた。「別の卷物を持つて來て、彼のユダの王エホヤキムの燒いてしまつた最初の卷物に載せてあつた凡ての言葉を書き記せ」と仰しやつた。

（ハ）王の悲しむべき終。（廿九—卅一を話す）。エレミヤは服從した。新しく書いたのには王の上に落ち掛からんとする恐ろしい刑罰が豫告されてあつた。彼は既に卷物を亡ぼし、エレミヤをも滅ぼさうと試みた、どうしても助を受けることを好まない。彼は同じ精神を其の征服者ネブカデネザルにも示した。それが爲に、エレミヤの豫告通りに、彼は並の囚人として死に、その死體を葬つて貰ふことすら出來なかつた（三十節）。

主なる敎訓——聖書は人間に授けられた神様の御言葉である。私共は之を尊び、讀み、そ

の敎に服從しなければならぬ。

第四十五課　エレミヤと柔弱なるゼデキヤ王（十一月九日）

（エレミヤ記卅四〇八—十七。卅七〇十六—廿一。卅八〇四—十三）

緒言——今日は、實に柔弱で氣が變り易くて、やたらに約束を破つた王の事を習ふのである——神様に對し、ネブカデネザル（自分に王の位を呉れた人）に對し、最上の友なるエレミヤに對し、また其の奴隷等に對して約束を破つた。高壇からエレミヤ記卅四〇八—十七を朗讀。

一、ゼデキヤは其の奴隷等に不誠實（卅四〇八—十七）

（イ）奴隷等は解放さる。神様はその民にお互同士を奴隷にすることを禁じておいでになつた、併し彼等は神様の律法を破つて居つた。ゼデキヤは今や嚴かなる契約を立てゝ、男と女

との凡てのヘブル人の奴隷に自由を與へた。彼等はその自由になつたことを喜んだ。

(ロ)又もや奴隷にさる。突然ゼデキヤは其の言葉を違へた。邪曲にも、新たに解放された奴隷に再び前の境遇に戻れと命令した――結局何の自由も與へなかつた！

(ハ)契約破棄に對する神の怒。そこで神様はエレミヤを遣して云はしめ給うた「我は汝等の先祖がエジプトで奴隷となつて居たのを救つたのである。我は、ヘブル人の奴隷は七年を滿期として自由にしてやらねばならぬと云ふ律法を拵へた。到々我が命に從つたと思へば、また言葉を違へて、自由にしてやつた男女を連れ歸つて奴隷にした。汝は奴隷釋放の事に於て我が云ふ事に從はなかつた。視よ、我は劍と饑饉と流行病とに自由を與へようとして居るのである。汝等自身が捕虜となり奴隷となるであらう」と。

二、ゼデキヤはエレミヤに不誠實（卅七〇十六―廿一）

(イ)エレミヤは王より相談を受く。これより後間もなく、ゼデキヤは、敢て其の役人等に反對することが出來なくて、秘かにエレミヤを呼んで來させ、何か神様から彼にお言葉が降

つて居ないかと尋ねた。エレミヤは「左様で御座ります」と答へ、「何時までネブカデネザルに對抗しても決して御成功なさいません」と云つた。それからエレミヤは王に、自分を再び地下の牢獄に送り返さぬやうにして戴き度いと願ひ、其處へ行けば死んでしまふと云つた。

(ロ)エレミヤは王に助けらる。ゼデキヤは心を動かされ、エレミヤを牢獄の庭の方に置くやうに命令した。そこは光も空氣も充分であつた。そして續けられる限りは日毎のパンの當がひをも戴けるやうな計らひを受けた。

(ハ)エレミヤは王に棄てらる。「此のエレミヤを殺して下さい。彼は邪魔になるのみで、何の助にもなりません」と惡い役人等は云つた。王は薄弱にも答へた「彼は汝等の手の中にあるのだ。我は汝等に逆ふことが出來ない」と。

それで彼等はエレミヤを連れて行き、綱で縛つて暗い穴の中に彼を釣り下した。彼はその底の泥の中に沈んだ。

三、ゼデキヤとエテオピヤ人（卅八〇四—十三）

（イ）エテオピヤ人はエレミヤの爲に訴ふ。エベデメレクは屈竟な勇氣のある精力旺盛なアフリカ人であつた。エレミヤがそこに投込まれたことを聞き、急いで王の所へ行つた。王は裁判所に座つて居つた。彼は云つた「王樣よ、我が主君よ、彼の人々がエレミヤにした事は善く御座いません。彼等はエレミヤを阱に投げ込んだので御座います。市には食物が少しも殘つて居ませんから、彼は屹度あそこで餓ゑて死んでしまひます」と。

（ロ）王はエレミヤの放免を命ず。ゼデキヤはエベデメレクの言葉に感動した。「汝は此處から三十人の人を連れて行つて、死なない間に、早くエレミヤを阱の中から曳きあげよ」と彼は云つた。

（ハ）預言者は救出さる。王がまた考を變へない間に、エテオピヤ人が大急ぎで進んだ。彼は勇氣がつたと同時に親切であつた。古い着物の布片を集め、綱に附けて阱の中へ釣り下した。綱で身體の擦れぬやうに、その布片を脇の下にはさむやうにとエレミヤに話した。

エレミヤはその通りにして阱の中から曳き上げられた、そして幾分か自由を與へられつゝ尙ほ牢獄の中に居つた。

主なる教訓——嘘を云ふ人が、快く其の嘘を止めてしまふまでは誰もその人を助けることが出來ない。

第四十六課　エレミヤの勸告は用ひられず（十一月十六日）

—（エレミヤ記卅八〇十四—廿八。卅九〇一—八）—

緒言——エレミヤは其の國民を助けようとて、彼等とその王とにネブカデネザルに服するやうに願ひつゝ、勇ましく努力して居た樣子を見た。ユダヤ人等は彼の言葉を聞く事をも信ずることをも好まなかつた。今日は彼等を救はんとのエレミヤの最後の試みが失敗したところを見るのである。高壇からエレミヤ記卅八〇十四—十八を朗讀。

一、王はエレミヤの忠告を求む（卅八〇十四—十八）

（イ）エレミヤは王の前に出づ。今やエレミヤは牢獄から救出されたので、ゼデキヤは彼に相談しようと決心した。それで彼を秘かに神様の家に連れて行つて、「汝に尋ね度い事がある。少しも隱さずに云つて貰ひ度い」と彼に云つた。「若し私が云ふならば、私を屹度殺すやうなことがありませんか。そして私が勸告を申上げてもお聽きになりますまい」とエレミヤは云つた。王は「我は汝を殺さない、又汝を殺さうとする人々に汝を渡すことをもしない」と云つて、神様の御名によつて彼に神聖な誓をした。

（ロ）エレミヤは彼に眞理を語る。そこでエレミヤはこれを最後に神様の御名によつて明白に王を戒めた。若しゼデキヤが意地張ることを止めて、市を取卷いて居るバビロンの士官等に身を任せさへすれば、たゞに自分とその子供等と丈けでなく、市をも救ふことが出來る。若し意地張るならば、エルサレムは燒かれ、人民は奴隷にされ、ゼデキヤも免れないのであつた。

二、王は敢てエレミヤに從ふ勇なし（十九—廿八）

（イ）彼は笑はるることを恐る。然るに王は「我は、既に敵に捕へられて行つて居るユダヤ人等を恐れる。彼等は我を嘲笑ふであらう」と云つた。ゼデキヤは嘲笑に頓着せぬ丈けの勇氣が無かつた。

（ロ）エレミヤの最後の懇願。「さう云ふ事はありません。何うか神様の御言葉に從つて下さいまし、さうすれば御生命は助かります。若し拒むならば、汝の家に居る婦人等は敵軍の餌食となつて曳き行かれ、汝レ事を、惡友に誘はれた爲に泥の中に足を沈めてしまひ、今となつては其の友も去つて顧みないと云ふでありませう」とエレミヤは訴へた。

（ハ）王は顧問役等を恐る。ゼデキヤは尙ほも躊躇した。彼は云つた「此の事を人に知らせてはならぬ。さうすれば汝の生命は殺される。若し二人で一緒に話した事を尋ねる者があるならば、たゞ牢屋に送り返されないやうにお願ひしに來たのだと云へ」と。彼はエレミヤに相談したと云ふ事を知られることをさへ怯ち〳〵して居た程にまで周りに居る人々を恐れ

た。それで誰もエレミヤが何を忠告したか知らなかつた。その間に刑罰がだん〳〵と近づいた。

三、エレミヤの言葉が事實となる（卅九〇一—八）

（イ）エレサレムは占領さる。ネブカデネザルは永く待ち、隨分忍耐した。今や遂に彼は、自分に叛き且つ其の言葉を違へた人に報をした。エルサレムは占領され、バビロンの士官や役人等は乘り込んだ。

（ロ）王は逃げんとす。ゼデキヤはエレミヤの言葉が事實となるのを見た。彼とその軍勢とは、逃げようと思つて、夜中に園の入口を通つて市から忍び去つた。

（ハ）ネブカデネザルの審判。併しバビロンの兵隊が追ひ附いて捕へ、リブラと云ふ遠くの町へ彼を連れて來た。そこにはネブカデネザルが居つた。其處に於て彼は其の征服者を面と面とあはせて見た。ゼデキヤの子等は彼の目の前で殺され、また彼の重立つた部下も同樣にされた。ゼデキヤ自身は盲目にされ、鎖で繫がれ、バビロンに曳き行かれて其處で死んだ。

彼の御殿も市も火で燒き拂はれ、エルサレムの石垣は崩壞された。

主なる教訓——善き忠告を拒む人々は自分の上にも他の人々の上にも困難を招く。

第四十七課　第四復習日（十一月廿三日）

エレミヤとエルサレム陷落（エレミヤ記卅九〇十一—十八。四十〇一—六）

注意——第十課の初めにある注意は今日の復習日にも適用さる。

●質問（各質問の終の括弧内の數字は其の答を見出すべき學課の番號である）

一、ヨナは何う神樣に叛きましたか。その爲に何うなりましたか（卅六）

二、神樣はヨナを何う云ふ樣にして死より免れしめ、また彼の祈禱に答へて何うお助けになりましたか（卅六）

三、ヨナの說敎がニネベに與へた結果は何うでしたか。何故ヨナは怒りましたか（卅七）

四、ヨナは神樣の憐憫と忍耐とを何によつて學びましたか（卅七）

五、イザヤの唇は何う云ふ樣にして潔められましたか。彼は神樣のお尋ねに何と答へましたか（卅八）

六、ヒゼキヤが嘲られ罵られた時に誰に向つて慰藉を求めましたか。預言者は彼に何う云ふ答を送りましたか（卅九）

七、エルサレムはセナケリブの手より何う云ふ樣にして救はれましたか（卅九）

八、ヒゼキヤの祈禱と涙とに答へて神樣は彼に何を聽き容れておやりになりましたか（四十）

九、バビロンから來た外國人が去つた後に、イザヤがヒゼキヤを叱らねばならなかつたのは何う云ふ譯ですか（四十）

十、私共はオデデの勇氣から何を學びますか。彼は何う云ふ樣にして捕虜を助けましたか（四十一）

十一、神樣がエレミヤを神の使者にする爲に召し給うた時、彼は何と云ひましたか。神樣は何をお約束になりましたか（四十二）

十二、エレミヤを助け勵ました青年は誰ですか。また何故エレミヤの喜悅が悲哀に變りましたか（四十二）

十三、人々がエレミヤを石で擊殺すと脅した時に、彼は何と答へましたか（四十三）

十四、レカブ人がエルサレムに居る凡ての民の模範となつたのは何う云ふ點ですか（四十三）

十五、エレミヤに口授された神樣の御言葉を書き記したのは誰でしたか。何にそれを書きましたか（四十四）

十六、王は其の卷物を何う扱ひましたか。その時エレミヤは何うしましたか（四十四）

十七、エレミヤが新しい王を助けることが出來なかつたのは何う云ふ譯ですか。ゼデキヤの大きな缺點は何でしたか（四十五）

十八、エテオピヤ人が何う云ふ樣にしてエレミヤを死より救つたかを話して下さい（四十五）

十九、王は何故エレミヤの勸告に從ひませんでしたか（四十六）

二十、ゼデキヤとエルサレムとが何うなりましたか（四十六）

廿一、エルサレムが亡ぼされた時に、エレミヤは誰の命令によつて保護されましたか（四十七）

廿二、エレミヤは何う云ふ待遇を受けましたか。彼は何うする事に定めましたか（四十七）

●學　課

緒言――一つの都市が野蠻な兵隊の爲すが儘に棄て置かれた時に、實際何う云ふ目にあふものかは到底想像の及ぶところでない。老人、婦人、子供に對して何の尊敬をも有たず、家と云ふ家には盜と殺人と有らゆる種類の暴行とが行はれる。高壇からエレミヤ記卅九〇十一―十八を朗讀。

一、エレミヤは保護を與へらる（卅九〇十一―十八）

（イ）ネブカデネザルの命令。王は既にエレミヤの事を知つて居つた、或はダニエルから聞いたのかも知れぬ。其の司令長官に命を下して、彼を探がし出し、保護し、また彼に自由を與へよと云ひ附けた。

（ロ）エレミヤは牢獄より解放さる。司令長官は牢獄の中で彼を見附けた――自分の國人によつて其處に入れられて居つたのである。彼を連れ出し、重立つた信仰の篤いユダヤ人なるゲダリヤの保護の下に彼を置いた。

（八）エレミヤの救助者も亦免さる。神樣はエベデメレクを忘れ給はなかつた。エルサレムが奪掠にあふ時に彼が安全に守られるとの特別なる御言葉を彼に送り給うた。彼の生命は救はれた、何となれば彼は、恐れつゝも、エレミヤの神樣を信じて居つたから。

二、エレミヤは自由を與へらる（四十〇一―六）

（イ）バビロンの鎖より解かる。エレミヤが長い捕虜の行列の中にあつて暫くの間鎖に繋がれて居たことは明白である。併し今や司令長官は彼の鎖を斷ち切つて、彼に自由を與へた。

（ロ）異敎の士官の言葉。此の大將がエレミヤに云つた「汝の神樣が此處に此の災禍をお降しになつたのです。汝の國民が神樣に罪を犯し、その御聲に從はなかつたから、斯う云ふ事

になつたのです」と。大將は尙ほ言葉を加へて、エレミヤがバビロンに行くもユダヤに止まるも好きな樣にして宜いと云つた。

（八）エレミヤの決心。エレミヤは彼の親切に大いに感動したに相違ない。何れに定めて宜いか殆ど惑うた。暫くして司令長官は再び彼を呼んで來させて云ふには「バビロンの王の任命した新任のユダヤ總督なるゲダリヤと一緒に止まつては如何です。或は何處へなりと宜いと思ふ所へいらつしやい」と。それで大將は彼に贈物を渡した。そしてエレミヤは新任の總督と共に住む事とし、民の中の極貧者を敎へたりし、そのお世話をしたりした。

註――その後ゲダリヤはユダヤ人に殺された。ユダヤ人はその爲にネブカデネザルを恐れてエヅプトに逃げた時に、エレミヤとバルクとも連れて行つた（列王紀略下廿五〇廿二―廿五）。彼の最後の事は不確かである。一說には、その國民を正しき道に導かうとした爲に、同國人から石で擊殺されたと云ふ。

主なる敎訓――假令世の人は神の民の言葉を拒むとも、神樣は御自分の民を顧みて保護し給ふ。

第四十八課　試煉にあへるヨブの忍耐（十一月卅日）

―（ヨブ記一〇一―廿二）―

緒言――今日はヨブのお話の中にある主なる出來事に就いて習ふ三回の學課の最初の分を習ふ。これは現存せる世界最古の詩文學であると思はれて居る。高擅からヨブ記一〇一―十一を朗讀。

一、ヨブは評價さる（一―十一）

（イ）他の人々の見たるヨブ。ヨブは多分偉いアラビヤ人の首長であつたらう、美しい眞直ぐな人物で、凡ての人から尊敬と愛とを受けて居つた。彼には七人の息子と三人の娘と大いなる財產――千を以て數ふべき羊、駱駝、並に許多の牛と驢馬――とがあつた。彼は其の頃其の地方に住む凡ての人の中にて最偉大の人物であつた。ヨブは其の子供等を甚く愛して居つた。彼等は多分誕生日毎にお祝の御馳走をしたのであらう。そしてそれが濟む度毎にヨブは朝早く起きて彼等の爲に祈り、供物を獻げて、若し彼等が心の中で罪を犯したり、少しで

も神様を離れたやうな事があつたならば、赦して戴けるやうにとお願ひした。

（ロ）神の見給ひしヨブ。或日「神の子等」即ち天使等が神様の御前に出た、そしてサタンも來てその中に居つた。神様はサタンにお語りになつた。「汝は何處から來たか」とお尋ねになつた。するとサタンは地の上を此處彼處歩き廻つて來たと云つた。そこで神様は御自分の僕のヨブを見たかとお尋ねになり、彼のやうな善良で完全で、神様に忠實に事へる人間は世間に一人もないと仰しやつた。

（ハ）惡魔の云ひしヨブ。併し惡魔はヨブの善良なることを信じ度くなかつた。答へて云ふには「ヨブが汝を愛するのは損得づくでやつて居る丈けです。汝は惠の垣で彼の周りを圍んで居るではありませんか。彼の持つて居る物を取り上げておしまひなさい、さうすれば汝に祈ることなんか止めて、詛ふやうになります。」

二、ヨブは試驗さる（十二―十九）

（イ）神の御許可の下に。神様は惡魔の言葉の嘘であることを實際に證明し度いと思召した。「視よ、彼の凡ての財産を汝の手に任せる。唯かれの身體に手を附けてはならぬ」と仰しやつた。

（ロ）貧乏によりて。その直ぐ後に、一人の使者が大急ぎでヨブの許に馳け附けた。牛も驢馬も盜賊に奪はれ、僕等は殺され、知らせに來た本人丈けが逃げて助かつたと彼に告げた。そこへ第二の使者が來た。恐ろしい電光の爲にヨブの羊も牧羊者等も亡ぼされてしまつたのであつた。その模様を述べて居る間に、第三の使者は更にひどい報知を齎した――他の盜賊が駱駝を奪ひ去り、之を守らうとした僕等を殺してしまつたのであつた。

（ハ）死別によりて。第四の使者は最惡の報知を持つて來た。ヨブの息子息女等が長男の家で御馳走を食べて居たところへ、非常な大風が荒野から吹いて來て其の家を潰した、そしてヨブの子供等は悉くその下敷となつて死んだ。

三、ヨブの驚くべき答（廿―廿二）

（イ）彼の悲哀。ヨブは堪へ兼ねて、大いに力を落した。彼は起ち上つて外衣を引裂き、

頭髮を切り落した――その深き悲哀の記號である。

（ロ）彼の順服。それから彼は地に平伏して、順服の心を以て神樣を禮拜した。彼は此の大いなる悲痛の中にありながら、尙ほ神樣の惠と愛とを信じた。

（ハ）彼の信仰。彼は云つた「私は裸で此の世へ生れて來ました、又裸で歸るのです。神樣が下さつて、神樣がお取りになるのです。神樣の御名を讃めまつりませう」と。サタンの間違つて居たことが實證された。ヨブは、此の世の凡ての賜物を取り去られても、神樣を恨まずに、尙ほも神樣を信じ、また愛し奉つたからである。

主なる敎訓――假令私共の一番大切に思つて居る物を失つても、神樣の御旨に任せ、神樣を信じて居ることの出來るやうに神樣は私共を助け給ふことが出來る。

第四十九課　重なる試煉とヨブの堅忍（十二月七日）

―（ヨブ記二〇一―十三。十九〇十九―廿七）―

緒言――前週は、ヨブがその子供等と凡ての財產とを失つたけれども尙ほ神樣を信じて居

つたことを見た。今日はサタンが更に大きい試煉を請求し、ヨブが尙ほも勝利を得たことを見るのである。高壇からヨブ記二〇一―六を朗讀。

一、ヨブは復も評價さる（二〇一―六）

（イ）神の見たるヨブ。今一度神樣は裁判をお開きになり、サタンも其の中に居つた。神樣は同じ質問を彼にお尋ねになり、サタンは矢張り地の上をあちこち巡廻して居つたと答へた。再び神樣はサタンに、ヨブを見たかと尋ね、彼は完全な眞直ぐな人だと仰しやつた。「汝は我を勸めて、譯もないのに彼を亡ぼさせようとしたけれども、彼は尙ほ固く其の完全を保つて居る」と神樣が云ひ給うた。

（ロ）惡魔の最後の挑戰。「皮と皮との交換ならやります。人は自分の生命さへ助かれば、何でも與へます。彼の身體と骨と肉とに手を觸れて御覽なさい、眞正面から汝を詛ふでせう」と惡魔は答へた。

（ハ）神は其の試驗を許し給ふ。今一度神樣は惡魔に、ヨブを更に試みる許可をお與へにな

つゞいて「ヨブを汝の手に任す。只彼の生命に害を加へてはならぬ」とサタンに仰しやつた。

二、ヨブは肉體を苦しめらる（七―十）

（イ）彼のあはれさ。それで惡魔は神樣の御前を退いた。間もなくヨブは、最も苦しい恐ろしい病氣に襲はれ、遂に頭から足まで全身腫物で蔽はれるに至つた。あはれにも外に灰を積み上げてある所へ出て行つて、たゞ獨りその中に座つて居つた。

（ロ）彼の誘惑者。サタンは今や、ヨブに生かして殘して置かれた唯一人の者――彼の妻――を以て彼を誘はうとした。「あなたは矢張り信仰を續けるのですか。神樣を詛つて死んでおしまひなさい」と彼女は云つた。信仰と同情とを以て夫を助けようとはしないで、益々彼の苦痛を增加へるのであつた。

（ハ）彼の忍耐。それほどに苦しんで居たけれども、ヨブは妻に對して短氣を起さなかつた。「あなたは愚かな女の云ふやうな事を云ひます。何うです。神樣から幸福を戴いて置きながら、災禍の方は受けずに居ると云ふことがありますか」と彼は答へた。此の事に於てヨ

ブは何の不平をも云はず、唇を以て罪を犯さなかつた。

三、ヨブは友人等に誤解さる（十一―十三。十九〇十九―廿七）

（イ）友人等の沈默。此の三人の友人等はヨブと共に悲しむ爲に、連れだつて彼の所へ行くことにした。彼の所へ行つて見ると、その容貌が餘り變つて居て、遠くからは一寸見分けの附かぬ程であつた。彼等は悲しんで泣き、衣を引裂き、塵を頭の上に撒き散らした。彼等は灰塚の上に居るヨブの側に坐り込んで、一週間もそこに居つた。彼等は彼の深き悲痛を見たが、彼を慰め又は助ける爲に云ふべき言葉を有たなかつたやうに見える。

（ロ）友人等の非難。（話す）。遂にヨブが物を云つた、そこで友人等はそれに答へて、神樣は彼の罪の爲に正義の罰を彼に加へておいでになるのであると云つた。彼に何の益をも與へず、たゞ薄情な判斷によつて彼の悲哀を增すのみであつた。

（ハ）ヨブの勝利の信仰。ヨブが云ふには「私は骨が皮に着くほどになつて居る。友人方よ僕を憐んで下さい、神樣の手が僕にお觸れになつたのですから。何故君等は僕を苦しめるの

です」と。サタンはその友人等によつてヨブを怒らせようとしたが效はなかつた。ヨブは神様に向つて云つた「私は私を贖つて下さるお方が生きて居給うて、後の日に地の上にお立ちになること、そして私の此の皮、此の身體が朽ち果てた後に、肉體を離れて神様を見奉ることを知つて居ります」と。

主なる敎訓――自分を誤解する人々に取圍まれた時には、ヨブのやうに、神様に向つて慰藉を求めませう。

第五十課　ヨブの忠信の報賞（十二月十四日）

―（ヨブ記卅八〇一―七。四十二〇一―十七）―

緒言――ヨブが深刻に試みられ苦しめられたが、尙ほ神様を信じて賴つて居たことを見た。今彼と友人との間の長話を讀んで居ることが出來ない。今日は彼がより偉大なる御聲を聽いて居るところである。高壇からヨブ記卅八〇一―七を朗讀。

一、ヨブは神の偉大を悟る（卅八〇一―七。四十二〇一―六）

（イ）神御自身が語り給ふ。ヨブはその友人等並にエリフと云ふ今一人の青年の云ふことを聞いて居たが役に立たなかつた。彼等は彼を助けなかつた（卅二〇一―五）。今や神様御自身が大風の中から彼に質問し、又語り給うた。丈夫らしく腰をひきからげて、尋ねんとし給ふ質問に答へよと仰しやつた。

（ロ）御業によりて御自身を示し給ふ。神様は自然界の不思議に就いて彼に尋ね給うた。「地の土臺を我が据ゑた時に汝は何處に居つたか。誰がその設計をしたか。その土臺が何の上に置かれたか。誰が隅石を置いたか。其の時には朝の星が相共に歌ひ、天の御使等は歡び呼ばはつたのである」と。

（ハ）ヨブは慰められ、滿足す。ヨブは斯くも立派に忍耐したとは云ふものの、神様がお語りになるのを聞いて、自分が如何にも無智で、如何にも物事を知らず、目に見ることの出來る地の事すら碌々知らないと云ふことを悟つた。「汝は何事でもお出來になります。私は實

に無智で御座います。自分の知りもしない事を云ひました」と彼は答へた。尚ほ彼は「汝の事を耳で聞いて居りましたが、今は自分の目で汝を見奉ります。それ故私は我が身を厭ひ、塵と灰との中で悔いて居ります」と云つた。

二、ヨブは友人等の爲に執成す（七―九）

（イ）神は彼等を怒り給ふ。此の後に神様はヨブの友人の一人にお聯りになり、彼とその二人の連れとの事を怒つて居給ふとお告げになつた。「我の事に就いて汝等の云つた事は、我が僕ヨブの云つたやうに正しくはない」と仰しやつた。

（ロ）ヨブは彼等の中保者として選ばる。神様は此の三人の友人等に、牡牛を七頭と牡羊七頭とを持つて我が僕ヨブの所へ行つて、供物を献げ、彼にお頼みして、祈つて貰へとお告げになつた。「我は彼の祈禱を受入れて、罰すべき汝らの愚かな間違つた言葉の爲に汝等を罰することを止めよう」と神様が仰しやつた。此の人々は自分等はヨブよりも餘程賢くて善良であると思つて居たのである。今は彼に祈つて戴く必要のあることを知つた。

（ハ）ヨブの彼等の爲の祈禱は容れらる。三人の友人等はヨブに執成の祈禱をお願ひした。病氣で、寂しくて、貧乏で、見棄てられては居つたけれども、ヨブは前に自分を不親切に扱つた人々の爲に祈ることを喜んだ。神様は彼の祈禱をお聞きになり、斯く彼を誤解して居つた友人等をお赦し下つた。

三、ヨブは惠まれ、富まさる（十―十七）

（イ）ヨブは財産に富む。ヨブの試驗の日も今は濟んだ。惡魔は、ヨブが悲痛の中にも尚ほ神様を愛し奉つたのみならず、その隣人をも愛して、自分に對してあれ程蒲情であつた人々の爲にも快くよく祈つたと云ふ事實を拒むことが出來なかつた。それでヨブは病氣から恢復し、神様は彼に前に倍した多くの羊、駱駝、牛、並に驢馬をお與へになつた。

（ロ）ヨブは友人に富む。ヨブの親戚も友人も今は皆彼を見舞ひに來、食事を共にし、彼を慰めようと努めた。見舞ひに來る人は皆お金や金の環などの贈物を持つて來て與れた。

（ハ）ヨブは子孫に富む。神様はまたヨブに七人の息子と、失つた子よりも美しい三人の息

女とをお授けになつた。彼はその後更に百四十年も生きて、周りに孫や曾孫を見ることが出來た。さう云ふ譯で、ヨブは試煉を受けた爲に損はしないで、却つて財産に、友人に、子供に、そして殊に神樣の御惠に於て得をした。

主なる敎訓――神樣を信ずる人々は、神樣のなさる凡ての事の智慧と愛とに富める御目的を、早晩知る。

第五十一課　平和の君の來臨　（十二月廿一日）

―（ルカ傳二〇一―廿）―

緒言――今日はデツレヘムの厩の中にあつた馬槽の事を考へるのである。粗末で、人の目を惹かず、家畜の用ふる物であるが、しかもクリスマスの巡り來る毎に、人々の考の中に大いなる場所を占領して居る。高壇からルカ傳二〇一―七を朗讀。

一、馬槽が搖籃となる（一―七）

（イ）ロマの詔勅。大々的な國勢調査、卽ち人口取調が行はれることになつた。命令がロマ

から出た。何處の小さい町や村に居る人も皆その本籍地に歸つて、戸籍の調べに應じなければならなかつた。ナザレから來た大工のヨセフはベツレヘムを指して凡そ七十哩の旅をし、妻マリヤをも一緒に連れて來た。そのマリヤに神樣は今に可愛い赤ん坊をお授けになるのであつた。

（ロ）ベツレヘムに於けるイエスの御誕生。彼等はベツレヘムへ着いたが、同じく國勢調査で來た人々が一杯に居り、宿屋も滿員で、迚も宿ることが出來ない。それでマリヤは厩の中に居場所を見附けた、そして其處で彼女の可愛い息子が生れた。

（ハ）繃布。その邊の赤ん坊は、着物を着せないで、繃布と云ふ麻布で身體をぐる〳〵卷いて包み、頭と手と丈けを自由にして置くのである。マリヤは赤ん坊を寢かせる搖籃がなかつた。地面に置くのも宜くないから馬槽の中に枯草を入れて氣持のよいやうにし、その上に赤ん坊を寢かせた。

二、馬槽は天使の記號となる（八―十四）

（イ）牧羊者等の恐怖。その夜遠〳〵の野で、荒い獣が來ないやうに羊の番をして居つた牧羊者等に一人の天使が顯れた。天使の姿と邊りに照した不思議な光とを見て牧羊者等は驚き恐れた。

（ロ）天使の言葉。「恐れるな、大いなる歡喜の音信を汝らに告げる」と天使は云つた。そしてダビデの町なるベツレヘムに救主がお生れになつたことを彼等に告げた。ベツレヘムには大勢の人が群つて居り、他にも赤ん坊が居つたかも知れないが、繃布に包まれて馬槽の中に寢て居るから見分けることが出來るのであつた。

（ハ）天來の聖歌隊。天使が話を止めると大勢の天使があらはれ、彼と一緒になつて神様を讃美した、「いと高き處には榮光、神にあれ。地には平和、主の悅び給ふ人にあれ」と。

三、馬槽は牧羊者等の證據となる（十五―廿）

（イ）牧羊者等の急行。天使等が天國へ歸つてしまふや否や、牧羊者等は互に云つた「さあベツレヘムへ行かう、そして神様が僕等に知らせて下さつた子供を見よう」と。それで彼等

は急いで出發した。

（ロ）彼等の信仰の確證。彼等は眞直ぐに厩へ行つた、他の所には馬槽のあらう筈はないからである。そして中へはいつて見ると、マリヤとヨセフと天使から聞いた通りに馬槽に寢て居る赤ん坊とが居た。

これで彼等は、これが救主、卽ち主なるキリストであることを確信した。そして彼等は天使の云つた事を周りの人々に話した。マリヤはそれを聽いて居る間に、ナザレの家で自分になし給うた神様の御約束が實現し始めて居ることを悟つた。

（ハ）地上の聖歌隊。牧羊者等は何時までも其處に居なかつた。その見たり聞いたりした事に對して神様を崇めつ讃めつ、再び其の羊の所へ歸つて行つた。さて、さう云ふ譯で、最初のクリスマスには天に於て讃美があつた計りでなく、地上にも讃美があつたのである。

主なる敎訓――救主は、喜んで迎へ奉る凡ての人の心を其の住家となし給ふ。

第五十二課　平和の君を訪ふユダヤ人と異邦人　（十二月廿八日）

—（ルカ傳二〇廿五—廿八。マタイ傳二〇一—十二）—

緒言——前週は牧羊者等が天使の云つた通りに馬槽の中に居給ふ救主を見奉つたところを習つた。今日は救主が三種の異つた人々から三つの歡迎を受け給うた事を習ふのである。高壇からルカ傳二〇廿五—卅五を朗讀。

一、シメオンに歡迎され給ふ（ルカ傳二〇廿五—卅五）

（イ）シメオンへの神の御約束。救主がお生れになつてから六週間程經つた時、御母とヨセフとは神樣に献げる爲に彼を宮へ連れて來た。エルサレムにシメオンと云ふ老人が居つた。神樣は此の人に、死ぬ前に救主を見せて下さると御約束になつて居つた。シメオンは其の時の來るまで忍耐して待つて居た。丁度ヨセフとマリヤとが、モーセの命じた通りに献兒式を

行ひ、二羽の雛鴿を供へる爲に幼い救主を連れてはいつて來た時に、神樣は此の老人を宮に導き給うた。

（ロ）彼の歌と讃美。「これがメシヤである」と聖靈は彼の心に囁き給うた。それで老人は前に進み出で、幼兒を腕に抱き、立派な感謝の言葉を神樣に申上げた。神樣の御約束が成就され、凡ての異敎の世界を照す光、イスラエルの榮光となり給ふ救主を見奉つたから、もう死んでも宜いと彼は云つた。

（ハ）マリヤへの彼の言葉。ヨセフとマリヤとはシメオンの言葉に驚いた。彼は子供を渡して彼等に祝福の言葉を述べた後に、マリヤに語つた。彼女に告げた、イエス樣は反對迫害を受け、今それ程に喜んで居るマリヤの心は、後の日には苦痛の劍で刺し貫かれるであらうと。

二、アンナに歡迎され給ふ（卅六—卅八）

（イ）アンナの時を得た入來。宮の建物の中に、何時も宮を離れずに居るアンナと云ふ女預

言者が居た。彼女は百歳を越した老年であつた、そして夜も日も神様に事へて居つた。彼女にも神様は御子を見せた知り奉る喜びをお與へになつた。誰も彼女を呼びにやつたのではない。宮は大した建物で、庭や廊下や通路が澤山あつた、併し神様はアンナの足を導いて丁度善い時に彼女を入り來らしめ給うた。

（ロ）アンナの讃美の言葉。アンナは多分シメオンの言葉を聞かなかつたであらうけれども、赤ん坊を見ると直ぐにそれと知つて、神様が救主を此の世に遣し給うたことを感謝した。

（ハ）イエスの事を人に語りし最初の婦人。シメオンと異り、アンナはマリヤには語らなかつた、併し約束の救主を待ちわびて居た凡ての者に語つて、彼等の望んで居たメッシヤは既に生れ給うたと告げ知らせた。斯くてアンナは、喜ばしき救の音信を最初に宣べ傳へた婦人となつた。

三、東方の博士等に歡迎され給ふ（マタイ傳二〇一―十二）

（イ）博士等の探求。ヨセフとマリヤと其の幼い息子とは、今は自分等の家に移つて、靜かにベツレヘムで暮して居つた。その時外國の人々が駱駝に乘つて遠い國からやつて來た。彼等は不思議な星を見たので、その星の知らせた新しい王の居る場所を尋ねつゝエルサレムへ來たのであつた。ヘロデは、古い聖書の事を知つて居る人々に尋ねたところ、ユダヤのベツレヘムだと敎へた。そこでヘロデは博士等に云つた「ベツレヘムへ行つて幼兒の事を細に尋ねなさい。尋ね當つたら私にもお知らせ下さい。私も拜みに行きますから」と。

（ロ）博士等の報賞。博士等は王の云つた事を悉く聞き取つて、エルサレムを去つてベツレヘムに向つた。東の方で見た星が再び顯れて彼等を導き、遂にヨセフとマリヤとの住む小さい家の上まで來て止まつた。

星を見て博士等は喜悅に滿たされた。彼等はその家にはいつた、そして幼兒を見て其の前に平伏して拜み、其の頃の人々が王に獻げたやうな贈物――黃金、乳香、沒藥――を獻上した。

（八）博士等の歸國。尚ほベツレヘムに居た時、博士等は一つの夢を見た。それによつて彼等はエルサレムへもヘロデ王の所へも歸らずに、別の道を通つて歸國しなければならぬと云ふことを悟つた。それ故彼等はその通り服從し、誰にも一言も云はないで、默つて其の長旅に出掛けた。

主なる敎訓――私共が救主を自分の心に受入れて居るならば、神樣は私共銘々に何か特別な仕事を授け給ふ。

●親孝行デー學課

▲午前の部　サムエルの母ハンナ

―（サムエル前書一〇八―廿、廿四―廿八。廿〇一、二、十一、十九）―

緒言――今日は親孝行の事を特に考へ、又實行しようと決心する一日です。高壇からサムエル前書一〇十―十八を朗讀。

一、ハンナの祈禱（一〇二―十六）

（イ）ハンナの苦悶。ハンナと云ふ婦人は誠によい人であつたが、自分の生んだ可愛らしい子供が無いので淋しく思つて居た。殊に毎年家中で神樣を拜みにシロと云ふ町へ行く時には意地の惡い人も一緒に行つて、自分には子供があると威張つてハンナを馬鹿にしたり、神樣がハンナには子供を下さらないのだと云つて神樣を恨ませようとした。ハンナは唯さへ子供の無いのが悲しい上に、いぢめられるから尚ほ悲しくて御飯も咽喉に通らない程であつた。

ハンナの夫のエルカナは親切に慰めたけれども、ハンナの心の苦しみは癒されなかつた。

（ロ）切なる願。誰も慰める事の出來ない苦惱を抱いたハンナはお宮へ行つて神樣にその心の重荷を申上げた、大層泣きながら――長い時の間。而して若し能力ある眞の神樣が自分の苦惱を可哀さうに思召して、私に男の子を下さつたらば「これを一生の間エホバに捧げ」て神樣に御事へ申す人と致しませうと誓つた。

（ハ）柔和なる答。其の時祭司のエリは宮の柱の傍の壇に座つて居た。一人の婦人が入つて來て、何時までも出て行かない。じつと見ると、唇が動いて居るが聲は一寸も聞えない。あこれは醉拂の女だ、お酒の爲に唇がぶる〳〵して居るのだと誤解した。「こら！ いつまで醉拂つて居るか」と叱りつけた。

祈つて居たハンナは吃驚した。醉拂と間違へられようとは！ 併し怒らないで靜かに答へた「先生、私は醉つて居りません。心の心配を神樣に申上げて居りました。どうか惡い女と思はないで下さい。あんまり心配が多かつたので大層長く祈つて居たのでした」と。

二、祈禱の應驗（一〇十八―二〇十）

（イ）信仰の喜悅。祭司は、叱つた事を氣の毒に思つたであらう、ハンナを慰め、安心して歸る樣に云ひ、神樣がハンナの祈禱を聞いて下さる樣にと祈つて下さつたので、ハンナはエリに御禮を言つてお宮を去つた。もうハンナは前の樣に悲しさうにしてゐない、大丈夫！ 神樣がきつと良い樣にして下さると信じて、樂しく御飯も食べ、にこ〳〵して居た。

（ロ）愛兒の誕生。その信仰の如く、ハンナは今に子供が生れるとわかつた。その時の喜はどんなであつたらう。どうかよい子が生れる樣にと、嘸祈つたであらう。愈々元氣の良い產聲を聞いた時のハンナの喜はどんなであつたらう。お父さんのエルカナもどんなに喜んだであらう。ハンナは、神樣が自分の祈禱を聞いて、この子供を下さつたのだからとて「エホバに聽かる」と云ふ意味で「サムエル」と名を附けた。

（ハ）感謝の捧物。ハンナは一生懸命にサムエルを育てた。御乳を呑ませながらも、どうか信仰の善い立派な人になる樣にと心の中に祈つて居たであらう。

そのうちに段々と大きく丈夫になり、乳も呑まなくなつた。ハンナは、神様へ御約束した通り、エホバにお事へさせる爲に、幼いサムエルを連れてお宮へ來た。立派な感謝の歌を作つて神様を讃美した。その次のお話は午後にしませう。

主なる教訓――父母に取つては、此の世の中に子供程大切な寶物はない。

勸告――それ程大切にして下さる父母の愛を有り難く思ひ、本當に寶物と云はれる價値のあるやうな立派な心を有ち、善い行爲をするやうに努めませう。今日までの親不孝な行爲を悔改めて、孝行な子供にして戴くやう神様の御助を願ひませう。

▲午後の部　孝子サムエル

―（サムエル前書二〇十八、十九、廿一―廿六、三〇一―廿一。十二〇一―五）―

緒言――今朝はサムエルの御母さんの事を習つた。午後は、さう云ふ聖い母を持つたサムエルが、如何にその母の恩に報いたかを學ぶのである。サムエル前書三〇一―十を朗讀。

一、幼きサムエル（二〇十八、十九、廿―廿六。十二〇一―五）

（イ）お宮にて奉仕す。幼いサムエルは、自分を後に殘して歸つて行くお母さんの後姿を、どんなに懷しく見て居た事であらう。その目には涙が湧いて來たであらう。けれどもお母さんの敎を思ひ、その御望み通り善い人にならうと決心したであらう。祭司のエリはサムエルを孫のやうに思つて親切にお世話をして下さつたであらう。間もなくお宮の中で、自分に出來る御用をする樣になつた――御掃除をしたり、お使をしたり。

（ロ）惡感化を拒む。祭司のエリに二人の息子があつて、サムエルよりはずつと年上であつた。父に似ぬ惡い心を持つた息子等で、人民が神樣に供物をすると、この二人が一番善い處を盜んでしまふし、其の他種々の惡い行をしたので、人民は二人を嫌つた。サムエルは此の二人を見てどんなに驚いたであらう。時々はその惡事の御手傳を言附けられて困つた事もあつたらう。併しサムエルは、御母さんが可愛い自分をお宮に置いたのは、惡い事を見習ふ爲でないことをよく知つて居たから、その眞似をしたり仲間になつたりはしない――その爲

に時々は酷い目にあつた事もあつたであらうが。

（ハ）父母との面會。一年に一度父母がシロのお宮へ來た。其の時のサムエルの喜はどんなであらう、父母の喜はどんなであらう。お母さんはサムエルに丁度善い大きさの上衣をこしらへて來て着させ、サムエルの成長を樂しんだ。（ヨハネ第二書四節。）

二、神の人サムエル（三〇一―廿一）

（イ）夜半に呼ぶ聲。或晩サムエルは例の通りお宮に獨り寢て居た。お宮の燈火は煌々と輝いて居た。「サムエル、サムエル」と呼ぶ聲がした。ハッと目を覺ましたサムエルは、そら先生の御呼びだと跳起きて、エリの許へ行つた。「いゝえ、呼びはしないよ。歸つてお休み」とエリは云つた。をかしいと思ひつゝ、サムエルは歸つて寢た。また「サムエル、サムエル」と呼ぶ聲がした。今度こそとエリの許へ行くと、エリの返事は前と同じであつた。サムエルは寢た。又も同じ「サムエル、サムエル」と呼ぶ聲！ サムエルは感心にも、先生の御用かと三度目もエリの許へ走つた。

（ロ）神の御聲。これは神樣が幼いサムエルを呼び給ふのだと悟つて、エリは云つた「今度お呼びになつたら『僕きくエホバ語り給へ』と云ふのだよ」と。嗚呼初めて聞く神の御聲！ サムエルの心はどんなに踊つたであらう。神の御聲を聞き逃さじと待つ、緊張した其の心！ 「サムエル、サムエル！」サムエルは直ちに起き、畏つて「僕きくエホバ語り給へ」と答へた。

（ハ）國民救濟の大業。その夜の神樣の顯示は、エリの二人の惡い息子への刑罰の事であつた。サムエルは、正直に大膽にエリに告げた。此の頃エホバがその思召を人に語り給ふ事は無かつたが、其夜以後サムエルには屢々神樣の顯示があり、サムエルが神の御言葉として語る事は必ずその通りなつたので、人々は神の使者として彼を尊敬した。而してサムルエは當時イスラエルの人々が墮落して居るのを歎き、大人や子供にお話をして眞の神樣に立歸らせた。その結果イスラエルは、神の惠を受けて强大に赴いた。「忠臣は孝子の門に出づ」とは誠である！

主なる教訓――神様の御前に正しい人物となることは最も確かな親孝行の道である。

勸告――諸君もサムエルの如く、凡ての悪に遠ざかり、罪を悔改め、神様の御聲に從ひつつ日を送り、他日神様の爲、世の人の爲に奉仕する人物となり得るやう、今からその準備をなさい。（悔改の座）。

大正十三年二月十五日印刷
大正十三年二月廿九日發行

東京市神田區一ツ橋通町五番地
發行兼編輯人 山室軍平

東京市神田區一ツ橋通町五番地
發行所 救世軍本營

東京市小石川區大塚窪町一番地
印刷人 久保民生

受持生徒名簿（　科　組）受持組長

番號	生徒の姓名	宿所	年齢	誕生日	救はれて居るならば「救」と記すこと	訪問日附 一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
一				月　日													
二				月　日													
三				月　日													
四				月　日													
五				月　日													
六				月　日													
七				月　日													
八				月　日													
九				月　日													
十				月　日													
十一				月　日													
十二				月　日													
十三				月　日													
十四				月　日													
十五				月　日													
十六				月　日													
十七				月　日													
十八				月　日													
十九				月　日													
二十				月　日													

325
323

終